

「児童研究」誌における童謡蒐集（四）

國 生 雅 子

本稿は「児童研究」誌における童謡蒐集（一）（「福岡大学日本語日本文学」十六号 平成18・12）、同（二）（「福岡大学研究部論集」A人文科学編九卷一号 平成21・5）、同（三）（「福岡大学日本語日本文学」二十四号（平成27・1）の続稿として、同誌に掲載された歌謡に関する記事を紹介するものである。「児童研究」誌第四卷（明治34年5月～同35年2月）のうち、一号から六号（明治34年5月～10月）に認められる歌謡関係の記事を取り扱い、続きは別稿にゆだねることとする。

第四卷は「児童研究」誌史上最も多くの伝承童謡紹介記事が認められる。三号（7月）掲載の「近江湖北地方に於ける子守歌」に顕著なように、膨大な数の歌謡が集積されているためだが、重要な要因の一つとして、二号（6月）に掲載された理学博士渡瀬庄三郎の「蛍に関する伝説童謡の研究」において、蛍に関する俚歌童謡、及び遊戯、迷信等の情報を読者に求めた事が挙げられよう。

往古より多く人民の注意を惹きし動物には、何れの国にも種々の伝説の存する者にして、特に東洋人の蛍に対する思想の如きは、余程古き時代より存せし者の如く、日本の児童が蛍を愛玩

する事の深きは、泰西諸国にも決して其例類を見ざる次第にして、種々の童謡遊戯の児童間に行はるゝ、を見て知ることを得べし。

依て余は多くの児童教導に従事せらるゝ諸君に乞ふ所は、左の二問題を發して児童の答案を求められん事なり。

第一、蛍は如何にして毎年生れ来る者なるか。

第二、蛍は如何にして光を發し得るか。

答案を得られたる後に右二問に対して、左の如き解説を与へらるれば、児童をして蛍に対し、尚ほ一層の興味を増さしむるべし。

蛍の発光は燐の存在には更に関する処なし。発光器内に淡黄色を帯び脂肪に類似したる物質ありて、呼吸の際空気がより取りたる酸素に触れて、燃焼し、光輝を發する者なり。然れどもこの燃焼たる普通燈火の際起る、極めて物質の冗滅多き者にあらずして、蛍火には熱もなく、烟もなく、純粹なる冷光なり。蛍は未だ人工の企て及ぶ可からざる精妙を極めたる理想的の燈火器なり。

又蛍の發生は決して他の甲虫と異なりたる事なく、例せば彼

の日本産中最大の源氏蛭の如きは、夏期に草の根近き所に産卵し、卵は数週間の後孵化して蛆蛭となり、翌年晩春迄は、蛆形の儘にて生存し、蛭發生の二週間程前、蛹に化して地中に入り、遂に羽化して蛭となり、飛出づる者なり蛭となりたる後は、大凡三週間は生存し、其存命中再び産卵して、種族の継続を全うする者なり。

次に余が諸君と共に研究せんと欲する所は、蛭に関する俚歌童謡なり。是は児童が夏夜蛭を集むる時謡ふ者にして、地方によりて多少の相違あり。其異同を比較して、之れが地理的分布、地理的の变化等を檢せば、大いに趣味ある事なるべし。其他蛭に関して児童が有する遊戯、迷信等をも蒐集して、日本児童が蛭に対して起す、心理的反應の調査は、児童研究上多少の価値なしとは云ふ可からずと信ず。

渡瀬庄三郎（一八六二年・文久二〜一九二九年・昭和四）は東京帝國大学理科大学動物学教室の教授。生物の発光器の研究、生物の分布境界線（渡瀬線）などで知られるほか、秋田犬などの日本在来犬種の保存を呼びかけ、また沖繩におけるマングースの放畜を提唱するなど逸話も多い。国立国会図書館には、末尾に「明治三十三年二月五日 東京理科大学動物学教室に於て記す」と注記された「蛭の話」という小冊子が収蔵されているが、これは「動物学雑誌」百三十七号（明治三十三年三月一五日）に掲載されたものと同文である。さらに「児童研究」誌で読者に情報提供を呼びかけた翌年の明治三十五年（一九〇二）六月、『学芸叢談——蛭の話』（開成館）を刊行している。巻頭に横井也有『鶉衣』『百虫譜』の一節を引用した同書

は、蛭に関する動物学的解説だけでなく、古今東西に渡る興味深いエピソードを散りばめた、一般向けの読み物として仕上げられている。様々な和歌、俳諧が紹介されているが、残念ながら童謡に関する記述は認められない。なお、小泉八雲の長男・一雄の『父小泉八雲』（小山書店一九五〇年六月）には、蛭に関する資料蒐集に関して、渡瀬の援助を受けた旨が記されている。

渡瀬と「児童研究」誌を結びつけたのが、元良勇次郎（一八五八年・安政五〜一九一二年・大正元）であろう事は疑いない。日本における心理学の先駆者である元良は、学歴のない高島平三郎に心理学、教育学を教えた師であり、明治三二年（一八九八）一月の「児童研究」の創刊号には「祝辞」を寄せている。詳しくは下山寿子の論文を参照願いたい。「本邦心理学の創始者元良勇次郎の足跡を辿つて」によれば、彼はアメリカ留学中（明治一六〜二一・一八八三〜一八八八）、遅れて留学した渡瀬を自分の下宿に泊らせていたという。元良と渡瀬との繋がりが生じたのは、元良が教師として教える傍ら、帝國大学理科大学に選科生として籍を置いていたからであろう。それは丁度、渡瀬の在学時期と重なる。

渡瀬の記事に呼応して、同号の「雑報」欄にも「蛭の研究」という記事が掲載されている。編集の高島平三郎によるものである。

渡瀬庄三郎氏が、蛭のことについて、熱心に研究して居られその一部は、既に雑誌や新聞に出て居ることは、本誌の読者も大概承知して居られるでせう。氏は、此の頃、ますく進んで、あらゆる方面から、蛭に関する材料を集められ、本誌の読者にも、本号に掲げられたとほりの問題を出して、答案を求められ

ました。全国各地の小学教育者と、幼稚園の保母諸君、並びに心ある父母の方々は、子供に就いて、尋ね試みて、答案を本所に寄せられんことを希望いたします。これは、たゞに、専門學者を益するばかりでなく、子供に観察力や思考力をはげますため、なほ自然物に親しんで、物事を見たなりにしておかぬ習慣をつける上に、大へん利益のある研究です。しかも、丁度、此の頃は、蛍の季節ですから、小供は、此の問について、きつと充分な興味を持つことでありませう。

読者には真面目で熱心な教育関係者が多かったのである。四号（8月）、五号（9月）、六号（10月）に読者の調査結果が寄せられている。なお、本稿は（凡例）に示したように、「歌謡に関する記事は全て取り上げることを基本方針としているが、蛍に関する調査報告の「蛍は如何にして毎年生れ来る者なるか」「蛍は如何にして光を発し得るか」の問に対する報告は省略することとした。

また、六号の「雑録」欄には以下のような記事が掲載されており、「児童研究」誌がテーマを設定して能動的に全国の伝承童謡の蒐集を意図していたことがうかがえる。

○虫類を捕ふる歌

本誌は先に蛍を捕ふる歌に就て蒐集したることありしが、更に左の歌に就きて各地に行はる、ものを求む。

- (一) 蜻蛉を捕ふるときの歌
- (二) 蝙蝠を捕ふるときの歌

既に同誌には、蜻蛉、蝙蝠に関する歌が多く寄せられていたが、より詳細なデータを集約しようと考えたのであろう。しかし、それらのデータは整理、分類され「児童研究」誌に掲載されることはなかった。

〔凡例〕

- ・「童謡」に限定せず、一般の歌謡も採ることとする。
- ・明らかに近年、明治になってから歌われ始めたものと考えられるものも、「児童研究」誌が目指した児童の歌の実態観察という視点から、江戸、もしくはそれ以前よりの伝承歌謡と区別せず取り上げる。
- ・漢字は現行の平易な字体に改めた。仮名遣いは原文のままとし、誤植と思われる箇所も改めてはいないが、特に「ママ」とルビを付していない。歌謡の性格上方言を用いたものが多く、誤植可否かを判じがたい場合が多いためである。原文のルビ、傍点等は残し、変体仮名は通常の字体に改めた。なお、読みやすくするために空白部を補った箇所は□で示した。
- ・ある地方で歌われる歌謡を紹介した記事以外にも、歌謡に関する記事は全て取り上げることとする。
- ・主に遊戯法、方言、俚諺を紹介した文献であっても、歌謡を一作でも含むものは採った。
- ・短歌、俳句、唱歌、創作、外国の子供の歌に関する記事は除外した。
- ・記事の掲載欄名は、題名の前に「」を付して示した。
- ・筆者名が記載されている場合は、題名の後に（ ）を付して示した。

- ・題名や署名が本文と目次とで異なる場合、本文に従った。
- ・注は各記事の最後に「*」を付して示した。

明治34・5（4巻1号）

「研究法」○大山近在に於ける子守歌

（神奈川県 今井 貞二）

- ねんね寝なさいお休みなさい
鳥が鳴いたらごくろさん
- ねんね寝とくれ定めておくれ
親にねがひはこればかり
- うちの此子は宵からねむる
山椒つませて目をさます
- 一町二町とはお豆腐のことよ
一里二里とは道のこと
- いやといふのに御前もくどい
一度いやなら二度もいや
- 雨は天から横には降らぬ
風の吹き様で横に降る
- わしとお前と松原こせば
松の露やらなみだやら
- お前その様に悪酒のんで
後の仕末はだれがする
- あれ／＼見なさいあの木のまたで
猿が餅つく木のまたで
- 男だてなら大磯の浦の

浪のうつのを止めてみな
○うちの此子と夜飛ぶ鳥は
どこのいづこへとまるやら

○ねんね寝た子に香ばこ七つ
起きて泣く子に石七つ

○いややお母さん他人の子守
ひにち毎日なきどほし

○なくな嘆くな木の葉をかむな
いまにお米も三升する

○子守子でもつ乳でもつ
尾張名古屋は城でもつ

○いややお母さんなにして見ても
いやな仕事は手につかぬ

○わしと行かぬかお倉の瀬戸へ
しだれ桜の枝をりに

○犬やほへるな乞食じやないぞ
わたしやお茶やお茶培じ

○わしとお前はお倉のお米
いつか世に出てまゝとなる

○今の子守は油断が出来ぬ
子守しながら子を孕む

○佐倉宗五の子別れよりも
此子に別れがわしやつらい

○明のからすとにハとりにくい
可愛此子の目をさます

○子守いや／＼唐糸の着物

帯ハ金巾さめやすい

○花は千咲くなる実は一つ

早くむだ花散ればよい

○お釈迦様さへばくちをなさる

四月八日はまるはだか

○いやとおもへば姿もかほも

朧月夜のかげもいや

○月は山端におかくれなさる

わたしやどの子にかゝるやら

○寝てもねむたい此夏三月

だれがはじめた夜遊びを

○桜三月卯の花四月

わたしや五月ののほりだこ

○心がらだよ我が梅すて、

隣やしきの桃でなく

明治34・6（4巻2号）

〔研究法〕 ○子守歌

（伊予 加藤 正朝）

一かわいらしげな朝顔の花竹のかきにまきておる。

二うらの柿にもずのすをかけてなにをさへずるかたちち聞すればく

る／＼目の玉ぎつかいしよ。

三やれ、やかましやうどんやのとなりうどんそばきりやめてくれ。

四お、へ、ぬかすなぶげんしゃのこともせわにならなやちりほども。

五さんだんばたけのさやまめは、おまへさんがはしればみなはしる。
六竹にたんじやくたなばたさまはおもひ／＼のうたをかく。

七お、へぬかすな学校の生徒お、へぬかすと手がさがる。

八ばんずいいいちのこぶんのとうけいごんべいまるのはだかにおけか

るて寺西屋敷へほねひろい。

九つきのあかりはまろくてふといなぜにみかづきやせたのぞやせも

せいじやいやみあがり

十人ら、えいことや、字そろばんならてわしもならひたいじそろはん。

十一買ふてかづきなれ白手拭を 白は目につくひんがよいよー。

十二かわいらしげな学校の生徒席にもたれて本をよむよー。

十三かわいらしげやこうがの花よいつもごてんのふさのよな。

十四ひややつめたや手拭ほしや揃のゆかたのきれほしや。

十五とんどとんどとなる神さまよこ、は桑山おちやすまい。

十六おしやかさまさへばくちにまけて四月八日にやまるはだか。

十七一分やんなれ木船のせんど松葉船さへ二朱くれたよー。

十八しんでなるかや廿二や三に宮のしきぶがたてらりよか□宮のし

きぶはたてらりよけど御手を合しておがまりようか。

十九思ひんななやみのやつれるに思ふてそわれる身ではないよー。

思ふてそわれる思ふて思ふてそわれる身ではないよー。

廿おこりがんしやくおこたらひどいよーなべもはがまも一うちよー。

「研究法」近江湖北地方に於ける子守歌

(東野 生)

- 一、色にまよはぬ姿にやほれぬとかくあなたの氣にまよた
- 二、うたひなされやどなたもたれもうとてこぎりよはさがりやせぬ
- 三、うたはうたいもの道や通りものがめらりよとは知らなんだ
- 四、守と云ふやうひご商売を誰におそへてもろたやら
- 五、思ひ出しては風琴ならしうはき唱歌がやめらりよか
- 六、歌のご先生がござるとも知らず歌をうたたらもどかれた
- 七、歌をうたたらもどかりよかいな歌にかんながかけらりよか
- 八、早くまるわけや、さんだいておかんおち、と云はしたい
- 九、島田けつころがしまるわけどやせはやり蝶々にゆひなさい
- 一〇、瓜が三味引く胡瓜がおどるひやけ茄子が舞をまう
- 一一、夏の暑ひのに桑もげくと二期の蚕がなかよかる
- 一二、歌はたもとに千ほどあれど色の交りらぬ歌はない
- 一三、色気付ひたら落ちよと思て走る小供は梅ひらひ
- 一四、島田さいみりやありやそかくと外に島田がなかよかる
- 一五、大工がてんか忍びの戸よとやにあけてころ、のならぬよに
- 一六、歌をうとでも書物を見てもわしとおまへさんのことばかり
- 一七、尾上片山菅飯の浦向ふに見ゆるは竹生島
- 一八、島の西から千よの椿落ちて流れる枝ともに
- 一九、島の西から三本小竹二本折られてわしひとり
- 二〇、意見しられて風琴なれどうはき唱歌がやめらりよか
- 二一、あのこ二人はそこくばなしわしもき、たい耳よせて
- 二二、伊勢の庄太さん又春お出春は日もよし日も長し

- 二三、伊勢の大神楽が京へのぼる笛や太鼓の音がする
- 二四、一條二條橋三條橋超えてうとてあるくは守の役
- 二五、こ、は四辻うれんどころひるはかくれて夜はでる
- 二六、伊勢のようじやの今切る竹は本は八尺中笛さ、ら末で歌かく
筆のぢく
- 二七、天の星さん数へて見れば四千九つ百七つ
- 二八、泣て悔んだとてどうなりましよな死で行く身が止めらりよか
- 二九、わしは親なし兄よめが、り雀一羽がとめられぬ
- 三〇、なろて忘れたいろはのいの字ひとり覚えたいいろの道
- 三一、竹に雀はしなよく止まるとめてとまらぬいろの道
- 三二、ひらけたらんのであるのがこはい下手な大工のふまひつみ
- 三三、二百十日の風さへ吹かな米の飯くお来年も
- 三四、わしが死んだらしきびの花を立て、おくれや墓どころ
- 三五、わしが死んだら三味よめり白木長持箆箆なし
- 三六、思ひだすなど云て別れたに思ひ出したか又来たか
- 三七、思ひ出しては写真をながめなぜに写真がものいはぬ
- 三八、歌もうたひます仕事もしますあひにやずばらも致し升
- 三九、らんぶ男にほやくまよてゆえんくとくろうする
- 四〇、井の蛙が鳴きだしましたあなたがたくおれきく
- 四一、わしとおまへはいとこやないかいとこ、ひとこまたいとこ
- 四二、大津営所は屋根まで白い中の兵隊さんは色黒ひ
- 四三、ありがとをなら雀がはたちわこて蛙が二十五六
- 四四、誰が死ぬやらしの竹藪に笹のうらばにぬひがなく
- 四五、わしが死んだてだれが泣てくりよを山の鳥か親ばかり
- 四六、おまへさんかよ誰やと思たようもだてこき供連れて

四七、わしはどうでも流の川の魚のえじきとなるわいな
四八、歌をうたうならきり、としやんとこ、は四ツ辻人が聞く
四九、首のはんけちもうやめなされおなか見やんせ富士の山
五〇、赤でおいまきもうやめなされおなか見やんせ富士の山
五一、わしはおまへさんにどっこひしよの金棒ふかいほれよをした
わいな
五二、道を通るならもの云ふて通れ暑い寒いといふて通れ
五三、朝間早うからお弁当さげて役場がよひの品のよさ
五四、朝間起きては日輪様をおがむ顔して殿おがむ
五五、柚はゆひよる蜜柑は見よる栢榴じやれよるじやらくと
五六、よさりお出たら裏せんざいの蜜柑きこくの下であお
五七、一時間まで二時間までと三時間まで四時々と
五八、わしとおまへは御門の扉昼はわかれては夜はあう
五九、死ねばしぶと埋めは土よ焼けば三合の灰となる
六〇、お山さんとは名はよけれども死ねば四つ足猫となる
六一、西の町から東の町までうとであるくは守の役
六二、通るたびく覚えの深いさした覚えのある柳
六三、風に提灯柳に手毬ふられながらも面白ひ
六四、雪駄ちやらく紺足袋はいて岡中かせんの千金丹
六五、水にへうたんこりや面白ひ軽ひ浮世をするわいな
六六、どんどくと流れる水はどこの関処で止まるやら
六七、男へちやでも南瓜の様でもお米がらとがあれば行く
六八、男へちやでもよひあねさんにさしてもろたは足袋の底
六九、面白ひとはどうか殿子花の蕾とかくわいな
七〇、思ひ出しては泣くあねとのご今朝も二度泣き今も泣き

七一、腰にちよ金のせこんどさげて四割五割の靴をはく
七二、ゆんべ夢見た大きなゆめを寺の太鼓ばいがよめよんだ
七三、ゆんべ夢見た大きなゆめを奈良の大仏さんを蟻がひく
七四、お父さん買ふとくれ朝鮮べにかんざし村でさ、んのはわし一人
七五、若しもおかさん呉服屋が来たら買ふておくれや博多帯
七六、寺のかいどが海ならよかる笹で舟してそめがい乗せてうちの
源造さんに權とらせ
七七、色は黒でも食てみておくれこれは文室のさはし柿
七八、川合牛蒡に古橋大根高野南瓜に杉野柿
七九、買ふておくれや蝙蝠傘を村でさ、んのはわし一人
八〇、寺のかいどの紅梅うめを花は千咲く実は一つ
八一、親が親なら子も子でござる鳥見やんせ子も黒ひ
八二、今夜行こかね来ておくれるか云ふに及ばぬこななるか
八三、芝居しようなら千本桜いとし殿子さんは義経に
八四、何か食ひたひ饅頭か砂糖か小米おこしか豆でこか
八五、堅田本服寺の紅梅うめは花は千咲く実は一つ
八六、わしはつりんばへたさへなげにやこんなつられよはしやせまひ
八七、むこのあねさん手にづかかけてお寺参りかしほらしや
八八、むこのあねさんわるひこたゆはぬ銀の簪今落ちる
八九、晒し手のごい遠目のよさよはたいよりてのいやしさよ
九〇、髪を結てくれ島田にちよんと人がすくよにまようよに
九一、親にもろたる錦出の茶碗わつてかくしておくれわいな
九二、こんな殿子に三年そへば骨もくづける身もやせる
九三、わしのたもとは七福神のお客あるうち福のかみ
九四、桶屋こんくつかな食えんわたしや守奉公せな食えん

- 九五、あんねおかさなかみやがやけるかみにことかくみのがみに
 九六、死でしまひたひ師走の月にゆき(生)てもどりたひお正月に
 九七、死でしまおか今かみきるか髪はのびるもの身は大切
 九八、ついで行きたひ今行く人にとこの野山で捨てらりよと
 九九、あんねおつかさん地獄の道に鬼が衣着て後生願う
 一〇〇、よんべゆめみた地獄のゆめを鬼は飯たく閻魔さんうつす小
 さい鼠がお膳出す
 一〇一、わしとおまへは疎水のまんまほれて間もなく深いなか
 一〇二、赤ひ顔してわらんじはいてどこへ行かんす南瓜さん
 一〇三、よいかくとあの藁小家にいつもしてゐるかんれんぼ
 一〇四、東山にと今咲く花はききよかるかやおんなめし
 一〇五、わしの行く家かね瓦葺なかはしよえんのこけらぶき
 一〇六、汽車が来たく十時の汽車がわしの弟はのつて来た
 一〇七、早くいたいおかさんのそばへかへりとみないお主のそば
 一〇八、泣いておくれな人目にわるひお主や旦那さんに尚わるい
 一〇九、鳥も通らぬ山奥なれど住めば都やのや殿子
 一一〇、南瓜娘を頼んで見たら四十がらくあるきます
 一一一、いたち娘と名をつけられて道でおうたらきちんちよん
 一二二、すり鉢を伏せてながめりやありや富士の山味噌をするがの
 浦だもの
 一二三、い倉隠居が小屋かましても本屋でよとおも屋せぬ
 一二四、久し鯛ぢやに鮎鯛はすよ鯉が鯨なら鯛うぐひ
 一二五、土佐や加賀さは阿波讃岐でも長門淡路に伊勢甲斐な
 一二六、こたつに居てさいこの寒ひのにさぞや写真をだきしめよ
 一二七、せめて一声待つ夜のよさは鳴いて聞かせよほととぎす

- 一一八、なん紡績しておこして見ても寝入工女と思はる、
 一一九、恋の目じややら目がいとござるこひが叶たら目もなほろ
 一二〇、つばりやみやら酸いもの好む殿は高木の梅かちに
 一二一、明日の天気は請合いました西に黒雲まきたて、
 一二二、伊吹山さへ白もくきたにわしも其気で布子きる
 一二三、おまへ一人かこの奥山を二人づれよなかげともに
 一二四、わしとおまへさんは二文の銭よいつもちんく中がよい
 一二五、雨の降る日と日の暮れ方はあんじますよね親元を
 一二六、破れ障子と己のつらは見れば見るほどはりととなる
 一二七、守よ子守よ子をなかなかなよなかそまいとの為の守
 一二八、わしの殿子は此の川上に流れくる水なつかしい
 一二九、松の葉にさへ二人もねるにいかいばしよばはわし一人
 一三〇、この子かはさに二年も半もにくて居られよか半年も
 一三一、この子泣くので三度の食が胸につかへてしやくとなる
 一三二、殿子とい竹わしやといの水流れ来る水なつかしや
 一三三、この子養老の掬水の水流れ落ちます谷川へ
 一三四、今はうれしや殿子さんが近て雨のある夜はのきづたい
 一三五、来るかくと川下見れば見れば柳の影ばかり
 一三六、思て来たのに水かけられてわしの心は水心
 一三七、思ひ切らんせ木のぼりさんせ落ちて死なんせわしやにげる
 一三八、にくやの下手しもでのばんばらよしは殿の出舟の身をかくす
 一三九、にくいくと目でにらむよりにくかにくいとゆておくれ
 一四〇、寒ひ小さむい誨のねきやさむいのくとまらなる山のそ、
 一四一、寒ひことやにわがは、をしや寒かあたれといふてくよりに
 一四二、寒ひ小さむいこうさぶとてはてらのお鐘がはよはらな

- 一四三、おかやおとつさんよう思うとくれつらひつとめをしてきたに
 一四四、弁当片手に蝙蝠傘もつて学校通ひの品のよき
 一四五、一夜泊りの兵隊さんにまよて明日は喇叭の吹き別れ
 一四六、伊勢へ参らんしよば浴衣も買たるお山買はんしよば銭もやる
 一四七、お伊勢参りの今げこじややら笠が見えませ森山に
 一四八、おまへ見よとてわしや目をついたしかも茶えんのわかほへで
 一四九、ゆんべまどからおけそくもろた二つかさねて味噌つけて
 一五〇、ゆんべまどからちりめん五尺人にいふなと又五尺
 一五一、表羽二重裏縮緬の殿の着丈でなんぼする
 一五二、思い切らせ諦らめやんせごえんないのと思はんせ
 一五三、舟にのりや又船頭さんがたよりわしは入りむこ妻たより
 一五四、わしのおとつさん南からござるなほし〜と云ふてござる
 一五五、わしのおとつさん酒に酔て赤い手拭泥まぶれ
 一五六、わしのおとつさん蒸気の船頭かまがわれたら命がけ
 一五七、道のじゆるいのおたやんこけて泥のつかんのは鼻ばかり
 一五八、山てうまいのはぜんまいわらびそれについては山のいも
 一五九、梅はすい〜あんずはあまいおちた李は虫食らひ
 一六〇、人がものいふに返事もせんとごろかつんぼか耳なしか
 一六一、わしの殿子さんは京都へ学にのうてやりたいひぢぶとん
 一六二、かあいらし子はこかは目元かほにえくぼはしおらしや
 一六三、夏はあつかる瓦のやけで冬は寒かる川上で
 一六四、守を頼んで女を使ふてしきせよくれよいのくれ
 一六五、おまへ一人かお連れはないかおつれあとからかごでくる
 一六六、かごでくるよなお連れはあこかお手を引きよてくるお連れ
 一六七、あなたたきりよしわしやこんじよよしきりよとこんじよと

- かへとくれ
 一六八、おまへみたないよいきりよもてばしやばにくはないわしら
 ども
 一六九、男美人と生れて来たになぜに女がきらうやら
 一七〇、月夜ならこい暗ならこなよ暗の夜きてぶたれなよ
 一七一、茄子漬ほどしゆんだるものをだれが菜刀を入れたやら
 一七二、親の意見と茄子の花は千に一つもあざがない
 一七三、かあい〜がおい〜知れて今日で七日のせめにあう
 一七四、わしの殿子は木之本通ひ月に雪駄が二十五足
 一七五、わしの殿子さんは木之本通ひあんじますよね高橋を
 一七六、親がない子に親はと問たら親は二親極楽へ
 一七七、ちよいと腰かけらんかん橋に月のあかりでふみを読む
 一七八、証拠やといふて豆でこ二本証拠がへしの仕様がな
 一七九、誰やらきりよし玉子に目鼻誰やらほれるもむりはな
 一八〇、阿閉通れば桃庵様の庫がみえませ金庫が
 一八一、よめに行くとして筆笥まで買ったにへそが出べそでもどされた
 一八二、めでた〜が三つ重れば鶴がご門に巢をかける
 一八三、お月さんでも夜遊びなさる殿の夜遊びしたること
 一八四、山がやるにはや切りたてよたつにた、りよか子をおいで
 一八五、何んじや若ひしう顔色かへていやなしやばではないかいな
 一八六、今日も一日又日がくれた未来まちます若けれど
 一八七、りんきしよばせよ祈ろば折れ腰のかいけんだてじやない
 一八八、わしが死んだらおまへのはたへばけて行くぞようれんに
 一八九、四百四十の病が出たらわしの念やと思はんせ
 一九〇、わしの殿子は石垣つみでお手をつぶしてねてござる

一九一、おまへ靴々下駄々々笑ひどこで草履が立つものか
一九二、殿子取られて泣く子はひきよな殿子取りどくとられ損
一九三、心中したげなあのお山奥に十八娘と前髪と
一九四、心中したげなお岩と岩としかも溜池の真中で
一九五、千両やるとも車引やいやよ首に縄かけ猿回し
一九六、高い山からちんばがおりる笠が見えたりかくれたり
一九七、松にたんざくちりばに紅葉心あるなら出てあやれ
一九八、龍田川には紅葉ば流すわしは君ゆへ名をながす
一九九、姉と妹に紫着せてどちが姉やら妹やら
二〇〇、世間せばいかお門がないか顔の真中に芋いえて
二〇一、姉がさしたら妹もさしやれ同じじやの目の傘を
二〇二、おきくきくく酒屋のおきく酒もようきく名もお菊
二〇三、酒も呑まんせ一合や二合は三合までなら買ふて呑まう
二〇四、酒は酒屋によい茶は茶やにじよろは清洲の本町に
二〇五、おまへさんのよにそう酒くろてきはの払ひをどうなさる
二〇六、酒を呑む人しんからかあい呑んでくだまきやなほかあい
二〇七、か、よ蚊帳つれよもぎの蚊帳を久しぶりじやにねてかたろ
二〇八、妻にひかされ月日も忘れ鶯が鳴く春じややら
二〇九、西と東に立分けられてよらなわからぬこのことば
二一〇、西は極楽東は地獄さいの川原にふだが立つ
二一一、髪も結てくれあぶらもやるに乱れ髪では居てくれな
二一二、あんなどやろにやつれて見せてあいそつかしてひまをとる
二一三、ひまをおくれりや三行半に心ある人七行
二一四、文のうは書さうす墨なれど中にこひ字が書いてある
二二五、面白いとお月さんを見なよかづら男にまねかれて

二二六、今の若いしうはおいしやのまねか娘どうじやと手をにぎる
二二七、若い殿持ちやあんじるわいな他によい出る出来たかと
二二八、いとし殿子さんは今日どちどどこにどうしてござるやら
二二九、来てはかどに立ちのぞいては走り若い殿子はせはしない
二三〇、どんな男にどんすの羽織着せてあとみりや尚どんな
三二一、西と云ふたら東をさとれ北と云ふたらあけてくれ
三二二、思ひく／＼に八つ足かけて文をたがいにかきつばた
三二三、小さいなりにてなまちよございなしづい気を持つ信濃柿
三二四、大工殿に持ちやあんじるわいな太いお家のからきざち
三二五、わしの思てる大工さんは死ぬるあとに残るはかなくづ
三二六、わしのおとつさん芋くて死んだ芋の顔みりや思ひだす
三二七、小さいなりにして気はおさちやくなやもめ育ちか後家の子か
三二八、後家や／＼とあなどりさらす後家は五軒の倉が建つ
三二九、今のあて歌よく聞きなされ己れきけとのあてうたよ
三三〇、この小さい猫酒屋の子猫酒屋子猫はとりやげ猫
三三一、一夜こけて来い菜種の中で菜穂折れんやうにこけてこい
三三二、守りは守り連れ菜種は菜連れ大いあねさん男連れ
三三三、よんべよめよんで今朝顔見たらおかまじやくしのあらけづり
三三四、殿は短気で茶碗をなげるわしは呉服の綿でうけよ
三三五、ひまをとるとてすきかみしたらいきな髪じやと又はれた
三三六、おいしやさまでも有馬の湯でもほれた病はなほりやせぬ
三三七、松の木の根にくるみを植えてくるか／＼とまつばかり
三三八、松の木の根にいちごを植えておまへまつ代わしや一期
三三九、殿はよいから汽車馬車くれんわしはかどへも伝信機
二四〇、汽車の乗り場にステーションとこけてわしの心は伝信機

- 二四一、りんきしやすんな火のない火鉢誰れも手をさす人はない
- 二四二、破れ傘お守にさ、しお子がぬれてもかまやせぬ
- 二四三、三月半たちや身はかんの中あじきないわよのや殿子
- 二四四、あじきないとは思ふてくれなわしをたよりに思てくれ
- 二四五、あなた一人をたよりに思ふて死て往く時わし一人
- 二四六、死んで往く共一人はやらぬ死出の山まで送り出す
- 二四七、死出の山までおくりてもろて死出の山からわし一人
- 二四八、わしの殿子はとうまるかごよのせてお江戸の鈴が森
- 二四九、鈴が森とはうらめしござるいとし殿子は何のどが
- 二五〇、妻よそれほどあんじてくれな米のかひしめしたとがで
- 二五一、よあけがらすに引きおこされて帯をひきづるだんばしご
- 二五二、東山から今朝出た烏銭もないのにかおくと
- 二五三、わしはうたずき歌の数知らず野でも山でも歌一つ
- 二五四、誰やらくと裏からよぶに誰やら出たがるうちや出さん
- 二五五、お子が出来たらそれ幸に妻よきてくれ他所なれど
- 二五六、妻よあんな出来たる子ならわしも男やしもてやろ
- 二五七、わしはおまへに一ぼれ二ぼれこんどぼれたらこ、のぼれ
- 二五八、おなじ五本の指持ちながら人にまけるとは口おしい
- 二五九、いくらおかみの規則やがとて殿がやりりよか兵隊に

明治34・8 (4卷4号)

〔実例〕 ○ 螢の研究

(滋賀県伊香郡古保利村 小谷 源輔)

- (1) 螢は如何にして毎年生れ来るものなるか

(略)

- (2) 螢は如何にして光を發し得るか

(略)

- (3) 螢に関する俚歌童謡

一、ホ、ホ、螢よ、水くりよう、水につきんだら、たましんじろ、

たまかづら、(幾度もくりかへす)

二、ホ、ホ、螢よ、こい／＼、お前の夏の食ひ物は、山の奥の

どんぐりほし、あまかはむいては、がり／＼、しぶかはむいては、

がり／＼

三、螢さん、金次郎^{カネジロ}さん夜はちよーちんたかのほり、昼は、お笹の

露ねぶり、(幾度もくりへす) (又此の歌の後に一寸さかれ、一寸

とさかれと前回さけぶ事あり)

- (4) 螢に関する迷信

一、螢はほーれんが戦してまけた其ポーコンが出たるものなりと

二、楠正成の切腹したる跡から出でくるものなりと

三、まさよし様のポーコンから生れくるものなりと

明治34・8 (4卷4号)

〔実例〕 ○ 螢の研究

(安芸国仁方 能島 正夫)

曾て本誌で螢の研究を冀望されたから、余も受持生徒に就いて研究した尤も生徒がいまだ幼稚であるから中には意外の答案もあつたが兎に角参考迄にもと本誌の余白を汚すことにした。

- 一 螢は毎年何処より来るか

(略)

- 一 螢は如何にして火をとぼすか

(略)

明治34・8 (4卷4号)

〔実例〕 ○ 螢に関する童謡

(岐阜県池田郡 五十川 みつへ)

(一) 螢こい じやうろ虫 あつちの水はきたないに こつちの水は
あーまいに 茶びしやくもてこい くんでやるに

(二) 螢こい じやうろ虫 よるはちようちん たけのぼりあすはお
さゝのつゆねむり。

(富山県中新川 野村 さと)

螢こい 水のましよ あつちの水はにーがいし こつちの水はあー
まいし茶びしやくもてこい くんでやる

(磐城国磐城郡 猪瀬 乙彦)

ほうたる来い山からこい二疋も三疋も揃つてこいほたるのおやは
金持ちで夜はピツクリ高提灯ひるまは草場のお露のみ。

(越後南蒲原郡 桑原 はつこ)

ほうたる来い山アシ来いアンドンテフにのつて来い。

(備後福山 寺尾 辰之助)

ほうちやん来いヤマアシ来いアンドの光をちよいと見てこい。
ほうちやんこいほうちやんこいアツチの水にがいぞコツチの水甘いぞ

明治34・9 (4卷5号)

〔研究法〕 ○ 対馬の子守歌並びに児童語

(厳原 平山 利雄)

(二) 霜月はすは忙しい、正月ゆるりと乳吞まそ。

(二) ころ、ん山の兔はなぜにお耳が長いのか。ちいさい時にと、様
がお耳をくはえてひつぱつた。

(三) 児童語 トット(兵隊) コラコラ(犬) モヲ(牛) コツコ(鶏)
テエテエ(美) タント(大ソヲ) ニヤア(ネコ) カアカア(鳥)

明治34・9 (4卷5号)

〔研究法〕 ○ 螢に就ての研究

(京都 箕田 助五郎)

本年六月渡瀬理学博士から、螢について研究を出せよとの事が御誌
上とありましたから、尋常科三年生に問ひまして、次の如き結果を
得ました。

(一) 螢は毎年何から生れるか

(略)

(二) 螢は如何にして光を出すか、

(略)

終りにわが地方に行はれて居る、「螢に関する童謡」を紹介しませう。
最も多きは

(1) ほーたる こい虫く あんどの をかげで かさきてこい
(2) ほたるこい 虫く ひるは おばゞの (又はをさんの) ち、
のんで ばんは ちよーちん たかのぼり
以上二つにしてこれを少しくかへて

(2) の「ほたるこい虫く云々」を「ほたるこい かめきつとん
云々」とするもあり又全じ歌の「ばんはちよーちんたかのぼり」
と云ふを「ばんにはちよーちん ぶーらぶら」と云ひかへるもあ
ります

(3) ほたるこい 虫くゝ あんど のをかげで かさきてこい ひ
るは をかさんの ちゝのんで ばんには ちーよーちん たか
のぼり。

の如き全く(1)と(2)とをあはせたものもあります其他には次の如き
を聞きます

(4) 蛍こい水のまそ をやがないならこゝいこい いえがないなら
こゝいこい。

(5) ほたるくゝ なに蛍 川の水のめよ 蛍よのめよ 水をのんだ
ら ぼつと光りを とぼして にげよく。

(6) 蛍こい あまい水やろ ねるとこが なかつたら こつちこい。

明治34・9 (4巻5号)

〔紹介〕○丹後中郡地方俚謡

(丹後 椎の舎主人)

一 アラレ。ゴンゴロくゝ雪ボタくゝや

一 雨はふるくゝ権現サン (山名) はくもる

一 お月サン何才^{ナン}十三七ツそりや又若い若いも道理早^{ハヨ}おきて拝め^モ拝ま
うとしたらかねの緒がきれてツイ夜^{ハヨ}があけた

一 お月サン錢^{ゼン}一文おくれ誰がそういうたナナ (子モリを子が呼ぶ称)
がそういうたナナ憎いくゝやボン (坊) 可愛くゝや

一 鳥こいことしよ (旧二月朔馳走食フ事) ことしようも米がない□
米がなけりや田アすけ□田アすきや冷たい□つめたかあたれ□あた
りやあつい□あつかとあとへよれ□後へよりやこけるこけりや突

張かへ突張かや痛い痛たかいたちの糞つけやなほる

一 あま蛙殿はいつ死なさつた八日の晩に甘酒のんでツヒくゝ死なさ

つた (アマ蛙を土にいけて吊葬する詞)

一 あの児どこの児山家のヂイの児金ぬすんで鯛かうて食つてたいの
骨立て、ギヤスくゝぬかいた

一 佐野の三唐松に猿が三疋止つて後なも能無し先なんも能なし□中
の中の子猿がよう物しつて鯨川へとびこんで鯨一疋へさへて手で
とるも可愛し足でとるもかはい□ししがらでく、つて麻がらでに
なつてをがらがをれてきせるでになつて堂の前へ持つていてヂ、

にきれば、に一切ヨメのが足らいで油屋へ油一升かひにいって
油屋のかどで牛糞で滑つて馬糞で鼻こいで油一升こぼいて白^{シロ}ドンの

犬と黒^{クロ}ドンの犬とゲトくゝねぶつた□その犬どうした太鼓に
はつて仕もた□そのたいこどうした火にくべてしもたその火どう

した灰になつてもたその灰どうした麦にふつてもた其むきど
うした鶏がくつてもたその鶏どうした京や大阪の方へパツパと

たつてにげて仕もたア

一 夫餅^トつけ嬢^トきなどりせエオ蝶はんざり持て来い小僧^{コソウ}火たけばんげ
にやもち煮て食はせるぞ□あづき煮がよいか味噌煮がよいかおん
なしことなら小豆煮がよかる

一 けぶり京へ行け京にもちがつけるぞ
(しひりくゝ京へ行け……足のしびる、時)

一 ツンブリ虫出せわれ (汝) がえ (家) か焼けるぞ

一 チヨツペがチヨと来て張籠^{カサゴ}に雀が雲雀をこわうて (怖) チヨツチ
ヨイくゝや

一 中の中の小坊サンはなぜせがひくい巻^マつこにまかれてそれでせが
ひくい

一 大呂の山の雉の子泣くと鷹がつかむぞ

- 一 ほうたるこい／＼山吹やあんの光で皆来い／＼
- 一 ほうたるやアこい／＼やあつちのぶんぶ(水)は苦いぞこつちのぶんぶは甘いぞほうたるやアこい／＼やア
- 一 ギイヤおいで。ギイこの間をほれや
- 一 油屋へ行きしま御免戻りが大事
- 一 狐狩 アリヤ何 兎狸に鹿狩りワンツラワンワンのワアンとせ
- 一 あとの鳥先になれ先のからすあとになれ
- 一 とオびまへ／＼鳥笛吹け
- 一 鳥はかア／＼かん三郎とオびは熊野の鐘た、き
- 一 あしたあめふりか天気か(草履を投げかけかき言いつ、占ふ)
- 一 お多福めふく風がふきやようふく
- 一 由良サンどつち手のなる方へ
- 一 正月こい／＼まつとるぞ油のやうな酒のんでこけらのやうな餅くつて白春き白飯くひぬいて三日はけんたい(アタリマへ)まる休み
- 一 蝙蝠こい綿やろ
- 一 一足がいたいわいなざうりかうておくれ(片足にてとびつ、)
- 一 今日は何の日丑寅ねの日またさぐり／＼や
- 一 こ、までござれ豆いつてごろ／＼
- 一 ひとりおひあひ天からはつと(天下の法度)
- 一 シンデンボ。アイコデシヨ。スケロクセ。カツテモマケテモコン
- 一 ギリヂヤ(リヤンケン勝負)
- 一 ホーカチン(拳に息をかけ互に額を打つ契約に用ゆ)
- 一 猫はやりもちようやりもつに足袋かうてやろかせきだ(セツタ)かうてやろか口足袋もいや／＼せきだもいや／＼おれが好きなものなチユウチユとゴマメ酉頭巾ベツきんや
- 一 猫さん／＼鼠が十(二十、三十等)わアたいた(渡した)(鞠ツキ遊び)
- 一 猿が赤べべほいて旦那サンにつげうかおかみサンに告げうか告げうてくれなや今なつべる(シマフ)ワイヤ
- 一 ふつてもてつても淀の川瀬の水車
- 一 一盆に來いさばやろ(とんぼを放つ時)
- 一 てふ／＼チヨロ／＼菜の葉にとまれ
- 一 兎が豆くつてヒヨイ／＼
- 一 小太郎子に何くはしよたひ。はも。こち／＼云々
- 一 初がつぼんだ小豆三升米三升合せて六升ひいらいた
- 一 内のくんぐり戸はく／＼ぐりにく／＼くんぐり戸で又くんぐりなーほいた(く／＼遊び)
- 一 いんきよの米つき本屋の米つき(負はれて足を持ち上ぐ又背合せにて互にもち上ぐ)
- 一 てふちんぶら／＼お釜へまゐりませう
- 一 みかん きんかん わしやすかん子供にらくがんやりやだまる
- 一 とますかほ出せよんべの顔みなんだ
- 一 ないた児が笑つたやぶからとますがかほだいた
- 一 鬼のこぬ間に豆いつてごろ／＼
- 一 まねし万歳おとがい七ツ
- 一 いまきれたワ助サンのしな(尻)紙鳶の糸の切れし時
- 一 風やふけ／＼たこ揚れみな／＼こ、まで来て遊べ
- 一 螢／＼一寸おいでつゆくさたくさんごちせしよ
- 一 とんぼやとんぼ麦わらとんぼしほからとんぼもち竿もつておまへはさ、ぬ日なたはあつこち来て止れ日陰でやすめ

一への字になれ、くの字になれ（雁を見て）

一開いたく何の花ひいらいたれんげの花がひいらいたひいらいたとおもたら又チヨイとつうほんだ

一あそべとまれそのふのでふくあそぶも止るも心のま、に止れやあそべ心のま、に

一蝶さく菜の葉にとまれ菜の葉にあいたらさくらにとまれさくらのはなの栄ゆる御代にあそべやとまれとまれやあそべ

一うーささうささ何を見てはねる十五夜お月サンを見てはねる
一かりくわたれ大きなかりはさきに小さなかりは後に中よくわたれ
一かアらずくかん三郎親の恩を忘るなよ

一糸のころこいくま、くはしよ

一子供は皆々風の子よ風かふいて寒くなし雪かふつてもさむくなし昔の英雄豪傑にさむさにかぢけた人はなしわれは勇士のめばえ也

雪もふれく風もふけ
一おきよくからすと共におきよく雀と共に

一さけ花よさくらの花よのそけき春のさかりの時にさけ花よさくらののはなよ口ふけ風よ春風ふけよさきたる花をちらさぬほどにふけ風よ春風ふけよ

一風車風のまにくめぐるなりやまずめぐるもく
一まはれこまひとり立してたおれずにまはるしんぼう金なるぞ

一鳥はかあく孝行むすこ雀はちうく忠義のけらい
一はちすらありすら働くを人はなまけてよきものか

一まずぐに立てよ正しくむけよ左を見るなよ右をも見るなよ頭をまげずむねをば出しちかより過ぎずほどよくならべゆだんをするな

一こうれい守れ足なみそろへしづかにあゆめ

一ねむれく人形よねむれ泣くなく泣かずにねむれ涼しき木蔭に

とりたる床の上にて静に目をとぢふささねむれく人形よねむれ
一おきよく人形よ起きよあさねをするなとく起きいでよ今このま、
たく時とはなりぬれま、たく手伝ひするこそよけれ起きよ起きよ
人形よ起きよ

一めぐれる車ながる、水われらは休めどやむ時なし
一ふれく雪丹波のこゆき

一丹後但馬もあらき（新明け）チヨイく（イテタル雪の上を草履にて歩みつ、）

一ツバメスゞメ中よく遊べまへよなげよやなぎにたけに
一ポチ（犬の名）ヨ来いダンゴやるぞパンもやるぞ

一まなべよまなべたゆまずうまずいそげよいそげ学の道を
一われらは日本男児也世界で強いはわれら也幾千さうのぐんくわん
もいく百万の大軍も少しも恐る、事はないわれらが持てる鉄砲は
大和魂の玉をこめ一度にズドンと打てやろ

*この記事の最後の方に紹介された歌には、唱歌が多数含まれて
いる。報告者がそのことを承知して採録したか否かは不明。

明治34・10（4巻6号）

「研究実例」◎蜚の研究

（福井県口名市 野村 金蔵）

自分が今奉職して居る処は、福井県でも今迄は随分山奥の中に数へ

られていて、誰も余り好んで行かなかつた処だが、今日では少しく
人民も開けて教育の必要を知つてきて、昨年から高等科も設置した。

併し今迄は教育が余り振はなかつた、為に非常に生徒の力が足りな

い。畢竟兒童の思想が薄弱で兎ても都會の兒童の如き考へを持たない。曾て本誌で螢につきての研究を望まれましたから、此の研究は至極山間の兒童に適當だと思ふて、答案をか、せて見たが、（*一字欠おそらく「生」）徒は高等科であつたけれども、兎ても見る可き者は居ないが、三四年の内少し丈参考にと思ふて本誌の余白を拝借することにした。

一、螢は毎年如何にして發生する者なるか。

（略）

二、螢は如何にして光りを發するものか。

（略）

螢に関する童謡

螢こーとつ〜ど行燈の影から笠きてこい、あつちの水はあんないは、こつちの水は旨いわ。

螢こーぶんぶくろ、つあちの水はあんないは、こつちの水は旨いは、行燈のかけから笠きて養きてこい。

螢こい、ぶんぶくしやう、あつちの水はあんないわ、こつちの水は旨いわ、行燈の光りで養きてこい笠きてこい。

螢に関する迷信

（一）、螢は戦死者の妄念なり。

其理由、昔近江の石山に於て戦ありたり。今尚梅雨の頃夕方に至れば、螢合戦をなす、世人之れを以て螢は戦死者の妄念なりと言へり。

（二）、螢を捕りて葱の中に入れば、死して地獄の釜に入ると。

其理由。螢を捕へて葱の如き狭隘なる中に入れば、螢は其苦に堪へず。その怨恨にて死後地獄の釜に入ると。

（三）、螢家の中に入れば幸福ありと。

其理由なし。

明治34・10（4卷6号）

〔紹介〕備中西南部地方俚謡

（備中 平松 玖馬太）

- 一 雪やこんころ、霰やこんころこい、
- 一 お月様なんぼ十三、九つそりやまだ若いぞ、油買ひに酔買ひに油屋のかどで すべつて こけて 鼻ぢをだして 其鼻ぢを 何したら 犬が ねぶつて しいもうた その犬 何したら 太鼓にはつて しようた
- 一 向ふの堤へ 猿が三疋出合ふて 先の猿も もの知らず あとの猿も もの知らず いつち中の 小猿が よう ものしーつて 鯉川へ 飛びこんで 鯉こん おさへて 手でとるも かあはいし 足でとるも かあはいし とうしみ 以て く、ーつて 線香以て かないで 京の町へ 以ていて三分五厘にうーつて きた
- 一 でんでん虫 角だせ 杖と 笠と こうてやろ
- 一 おぼさま けさま 尻が ひよつくり 出ました 出てもだいない衣で かくす
- 一 ほたる ほたる そつちの水は 苦いぞ こつちの水は甘いぞ
- 一 烏 烏 あとみい さあきーゆみい 鉄砲うちが ねらようる
- 一 お多福 めふく風が ふーきや よふく
- 一 由良さん 由良さん 手の なる方へ
- 一 又 由良さん べつべ 手の なる方へ
- 一 みかん きんかん さげのかん おやちの せつかん 子がきかん すもう とりーや はだかで 風をひかん

一とんび とんび 家のまはりゆーき まはれ 鼠を 取りてほつて やろう
一泣た顔 どこへいた 風が吹て とーつてんだ
一鬼のこぬ間に 洗濯しようや
一まねし権八 ゑーつたのむすこ
一何こう べつたり 鍋蓋 すくもの 団子で ふうはふは(誹られし時の口へん事)

注

- (1) 下山寿子「雑誌『児童研究』の研究(1)——書誌的分析を中心として——」(『高崎商科大学紀要』19号 二〇〇四年二月)
- (2) 大山正・大泉溥「本邦心理学の創始者元良勇次郎の足跡を辿って」(『心理学評論』vol.57 二〇一四年一月)